

シリーズ
「景観文化考」第6回

S E R I E S

豊かに生きる

L A N D S C A P E



中井 和子 (なかい かずこ)

中井景観デザイン研究室 代表

東京出身。筑波大学大学院環境デザイン専攻修了。(株)G.K.インダストリアルデザイン研究所(東京)勤務を経て、1975年～78年フランス政府給費留学生として、マルセイユ及びパリの国立美術大学で建築・環境デザインを学ぶ。1985年建築・環境デザインの研究所を設立し現在に至る。北海道教育大学・札幌市立大学・北海道工業大学の非常勤講師、「まちの色彩作法」(共著)・「農業・農村と地域の生態」(共著)・「北のランドスケープ」(共著)など。

「ぼくの伯父さんの休暇」(原題“LES VACANCES DE M.HULOT”)という1952年のフランス映画がある。ジャック・タティ(Jacques TATI)が主役のユロ氏を演じているが、バカンス初日の車で身動きできない道路や人々があふれる海水浴場など、当時のバカンス状況をフランス風ユーモアで描いた作品で、カンヌ国際映画祭でも評価された映画だ。1952年ごろの日本は、まだ戦後復興の時期でバカンスどころの話ではなかった。

パリは芸術・文化の都として世界的観光地であるが、地方の農村を外国人が個人旅行する場合、フランスは極めて不便な国である。フランスの鉄道はパリを起点に地方へ放射状に走っているの、地方間を結ぶ交通手段は車以外にはほとんどない。旅行者は主要都市で下車して一日数本のローカルバスに乗り換えて目的地に行くか、道路網は発達しているの、レンタカーを借りミシュランの地図を案内に走ることになる。この点、札幌を起点に公共交通網が発達する北海道の状況とよく似ている。

フランスの地方の観光地は、第一にはフランス人の長期休暇のために存在している。したがって、バカンス法(「労働者の長期連続休暇取得を保障する法律」)が1936年に制定されて以来、各地方は国民が低料金で休暇を過ごせる休養施設整備と内容の充実に力を入れてきた。職業に関係なく長期休暇が可能であるため、自己の経済状態に合わせて休暇を過ごす手段を毎年考える必要から、多種多様なメニューが用意されている。先の映画から半世紀を経た今日、フランスの観光地はどのように変化してきたのであろうか。

19世紀末から1950年ごろまでのフランスは、強力な中央集権国家で社会全体が活力を失い、西欧諸国でも工業化の遅れた低い経済成長率の国であった。1960年前後のフランスは、パリへの一極集中と地域間の経済的格差、農業における条件不利地の過疎化・高齢化、都市の工業化進展による自然破壊と都市公害、集約的農業の化学肥料投入による環境汚染、地方の伝統文化や民家や街並景観の喪失など、その後の日本が抱える

諸課題と符合する内容を有した時代であった。1968年にパリのカルチェ・ラタン^{*1}に端を発した「五月危機」は、国内でくすぶる旧態然とした社会体制への抗議行動である。これらの社会的背景を踏まえつつ地方分権化が少しずつ動き始めていく。

バカンス法は豊かな経済力を持つ者が対象ではなく、一般労働者に長期休暇を保障する法律であり、1969年に4週間、現在では5週間の休暇を保障している。それと並行して、地方の自然環境の保全、歴史的街並景観の保存、農業の近代化と観光産業との連携等、多くの政策が打ち出される。例えば、1960年の「国立自然公園法」制定と「農業基本法」制定、また、1962年の通称「マルロー法」（保護地区に関する法律）等の公布で、フランスの歴史的建築物とその周辺景観の保全対策等が順次試みられる。さらに、1963年の国土整備・地域活動庁（DATAR：現在はDIACT）の設立で、省庁間を越えた地域整備や経済的援助の調整が可能となる。DATARの存在は、バカンス法による市民の長期休暇への施設の充実と外国人観光客の受け入れ態勢の整備も役割のひとつであった。1967年には「地方自然公園（PNR）」^{*2}が創設され、過疎化で崩壊しつつある地方の自然環境の保全と、農林業地域の産業活動の維持と美しい景観形成による観光等への経済支援等が推進される。

また、同時期のフランス起源の活動に、博物館学者で民俗学者のG.H.リヴィエールが創始した「エコミュージウム構想」がある。農民や一般民衆の日常の生活・

産業の営み、生活環境、地方の伝統文化と地域社会のあり方等の調査・研究を実施して、民衆文化の価値を地域の遺産として認識した。リヴィエールはさらに、地方自然公園のなかにエコミュージウムを設置することで、地方自然公園の存在に文化的観光資源としての付加価値をもたらすと考えた。地方の暮らしの文化が凝縮された民家を現地で保存・展示することは、地域資源の保全とともに、住民や子供たちが地域文化を学ぶ教育の場としても貢献できる。エコミュージウムは、地方自然公園の展開に伴いフランス国内に広まった。しかし、多くのエコミュージウムの乱立が質の低下を招く。その後、地方自然公園の自然・文化・遺産等の諸活動と地域教育のなかに、エコミュージウムの思想は継承されている。

バカンス法の長期休暇制度で人生を楽しむ機会を人々に提供しつつ、一方で、地方の自然・景観・農業・産業・観光等を充実させる多角的政策を実施して、疲弊する地方の経済活性化を促進したが、いかにもフランスらしい手法である。現在フランスの出生率は、約1.98（2007：INSEE）で微増である。食料自給率は約120%の農業国だが、条件不利地では地域に適した農村観光が推進され、歴史・文化を保全・継承する土地利用と街づくり政策から形成される美しい景観のなかで、家族がバカンスをゆっくり楽しめる生活は、多少の問題があったとしても、まさに「豊かに生きる」である。



※1 カルチェ・ラタン

パリ市内の地区の通称。カルチェは「地区」、ラタンは「ラテン語」。ソルボンヌ大学などのある文教地区。中世よりヨーロッパの学術の中心地として栄え、「ラテン語を話す学生が集まる地区」という意味が語源。



※写真撮影：筆者

※2 地方自然公園（PNR）

地方行政の諸機関と地域住民代表の合議組織により管理運営される。地域住民の意思が反映された公園の基本計画等を盛り込んだ憲章を作成し、環境省の審査を経て承認されて初めて成立する。憲章の有効期限は現在12年である。